

「なんですか……これ」

とある日の昼下がりに、上機嫌に外出から帰宅した師匠に突き出されたソレに、弟子は疑念に満ちた視線を向けた。見たことも聞いたこともないそれは、眼に痛いシヨッキングピンクの色合いを主張し、師の手の中でぶよぶよと頼りなく項垂れている。

おそらく筒状のものであり、師の手から突出した部分に穴があった。何かを入れるものなのだろう、と推測した辺りで師匠はにんまりと口角をあげた。

「おやおや、純情無垢な弟子はご存じないかな」

「魔法に使う触媒の一種ですか？ スライムみたいですけど……」

「実際スライムを固化化させて作っているから間違いいではないな」

「アンタ何やってるんですか」

サボリ癖しかない師匠が上機嫌に、しかも朝っぱらから出かけたと思ったらコレである。街から少し出た森に行けばたんまりいるスライムに悪戯をしに、わざわざ早朝から出かけたというのか。馬鹿じゃないのか。

「スライムを固形にして何の役に立つんですか？ ていうかそもそも、なんでこの形状？ スライムって通常

は球体ですよね？」

「ふふん。これには立派な理由があるのさ」

その説明をするためにまずはこつちにこい、と手招きをされ、弟子は思わず胡乱な目を向ける。絶対確なことにはならないと弟子の勘が警鐘を鳴らしている。この人が笑顔を浮かべるときは、大抵の場合人体実験染みたことをやらせようとするときなのだ。疑いたくもなる。

じりじりと、師から距離をとる様に後退りをする弟子に、師匠は深々と溜息を吐いた。

「はあ……何故逃げる。理由を説明するだけだと言っているだろう」

「本当に？本当の本当にそうですか？そう言っただけで終わったことありました？」

「十回に一回ぐらいはあつたんじゃないか？」

「信用ならない回数って自覚ありますよね！？」

段々師匠の青空のような瞳が面倒くせえと物語る様に半目になってきた。真つ白なまつ毛を瞬かせ、憂いを帯びた様な表情を浮かべるその端正な顔立ちが憎い。捨てられた子犬のような、どこか儂げな雰囲気を出されると、元来面倒見の良い世話好きの弟子は弱かった。

なんせ師匠の顔が大好きな弟子である。一瞬でも悲しそうな顔をされると胸が締め付けられる思いであ

った。あの表情は全部演技なのだが。

「少し、ここに座って話をするだけだ。さあ」

ぼんぼん、と師が美しい脚を交差させて座るソファの隣を叩かれ、弟子は何とも言えない表情で恐る恐る座った。なるべく近づかない様にソファの端に座ろうと肘掛けに手をつく。師の手の中にあるシヨッキングピンクのスライムが嫌でも視界に入り、形容しがたい顔が出来上がっていた。

「それで、そのスライムはどういった用途のものですか」

「うむ。その説明なのだが、実際に使ってみるのが早いと俺は思うんだ」

「うん？使う？今使うって言いました？」

「うん」

「いやうんじゃなくて」

ほらやつぱり口頭説明だけじゃあ終わらないじゃないか！と慌ててソファから立とうと腰を上げた弟子の肩を、師匠は難なく押さえつけた。